

青木昌彦先生追悼シンポジウム

「移りゆく30年：比較制度分析からみた日本の針路」

プレゼンテーション資料



岡崎 哲二

RIETIファカルティフェロー
東京大学大学院経済学研究科教授

2015年10月6日

青木昌彦先生の経済学：
計画理論・分配理論・比較制度分析

岡崎哲二
東京大学

アウトライン

- 経済計画の理論
- 分配理論:ラディカル派経済学
- 企業の経済理論
- 比較制度分析
- 歴史的体制移行のゲーム理論的分析
- おわりに

経済計画の理論(『組織と計画の経済理論』1971)

- 最初の著書
 - スタンフォード大学(1967-68年)、ハーバード大学(1968-69年)の講義ノートを基礎
- 「組織」(統一した目的をもった人間の集合)における諸活動の調整メカニズム(計画プロセス)に関する比較研究
- 大規模な組織を構成する人々がそれぞれ分散して保有している組織の環境についての情報を交換する様式、それに基づいて行われる意思決定の様式に関する比較分析の理論的基礎
- 3つの基準
 - 最適計画への逐次接近の可能性(安定性)
 - 情報効率性
 - 構成する各個人の動機(誘因)との両立性

経済計画の理論(続き)

- 2つの典型的な計画作成プロセス
 - 「模索」(Lange 1938)
 - 計画当局による市場メカニズム (Walras 1877) の模倣
 - 計画当局と組織内各単位が価格に情報を集約して情報を交換し、需給が一致する計画を編成
 - 「物材バランス」(ソ連型計画経済)
 - 計画当局と組織内各単位が数量に関する情報を交換して、需給が一致する計画を編成

経済計画の理論(続き)

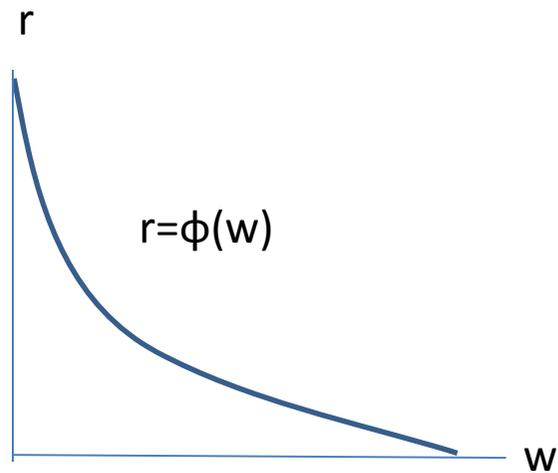
- 本研究の特徴・意味
 - － 組織の経済分析
 - － 経済の管理・調整メカニズムを選択可能な変数とする理論研究
 - － メカニズムの相対的効率性の環境属性への依存
 - － 伝統的なマルクス主義的経済分析からの決別
 - 「本書はまたその分析を主として数理計画法や、新古典派的(数理)経済学において発展せしめられた概念や手法にもとづいて行っている」
 - 「さして知的な創造力と分析力を要しない怠惰な政治的、教条的思弁は、経済システムの選択にかかわる理論を人間の間人らしいかかわり方を追求するという道徳的権威にではなく、非人間的な政治的権威に従属せしめることにおわるであろう」

分配理論：ラディカル派経済学 (青木・マーグリン、1973)

- 資本主義経済を描写する3つの代表的理論モデル
 - 新古典派、マルクス派、ケンブリッジ派
- 3理論の特徴を把握するための共通の基本モデル(n部門)
 - $(1+r)p'A+w\sigma'=p'$ (利潤率均等化)
 - A: 投入係数行列
 - p: 価格
 - r: 利潤率
 - w: 賃金
 - σ : 労働投入係数
 - 方程式n本、変数n+1個 (n-1個のp、r、w)
 - 体系を閉じるために不足している1本の方程式をどのように設定するか？

分配理論：ラディカル派経済学(続き)

- 言いかえると
 - 上の方程式から導かれる要素価格フロンティアのうえの1点をどう選ぶか？



分配理論:ラディカル派経済学(続き)

- 新古典派モデル、マルクスモデル、ケンブリッジモデルは、要素価格フロンティアの上の1点がどのように選ばれるか(モデルの閉じ方)についての設定によって特徴付けることができる。

←資本主義経済に関するビジョン

- 3つのビジョン
 - 新古典派:消費者による消費(貯蓄)の決定(時間選好)
→財市場・生産要素市場の均衡
 - マルクス派:実質賃金(w/p)=生存水準(「労働力の価値」)
 - ケンブリッジ派:「動物精神」(アニマルスピリット)→利潤率(r)

企業の経済理論(『現代の企業』1984年)

- 新古典派経済学の企業理論に代替する理論の提示
 - － 新古典派経済学の企業理論
 - 企業は株主集団の利益のために経営されており、また経営されるべき
 - 企業は、外部の製品市場と生産要素市場で決まる価格を所与として、すべて株主に帰属する剰余を最大にするように経営され、また経営されるべき(生産関数としての企業)
- 代替的理論の基礎となる基本的な観察
 - － 現代の企業における内部労働市場の大きな役割(Doeringer and Piore, 1971)
 - － 企業の外部における労働市場の役割は限定的で、労働力の配分や報酬決定の無視できない部分は企業の内部で組織的に行われている

企業の経済理論(続き)

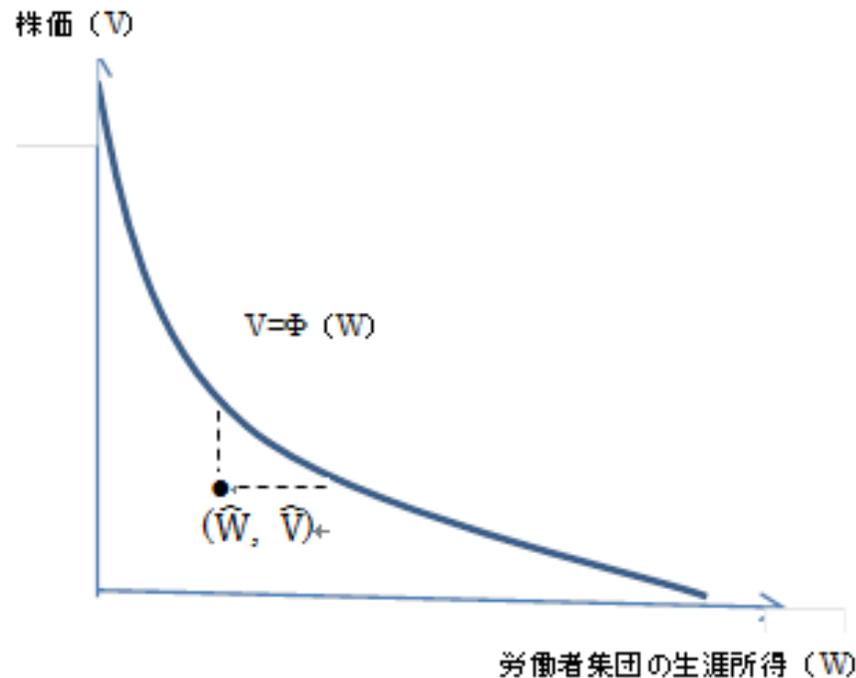
- 本書のアイデア
 - 内部労働市場に関する労働経済学の知見を企業理論に統合
 - ゲーム理論(協力ゲーム)の応用
 - 協力ゲーム
 - ゲームのプレイヤー間での情報交換・交渉と拘束力のある合意が可能という前提
 - 非協力ゲーム
 - ゲームのプレイヤー間での情報交換・交渉と拘束力のある合意ができないという前提

企業の経済理論(続き)

- (協力)ゲーム理論の視点から見た企業
 - 企業は、株主集団と従業員集団を構成員とする連合体
 - 企業の市場における行動と企業内部における分配は、株主集団と従業員集団の協力ゲームの解として決まる
 - 新古典派企業理論の相対化
 - 従業員の内的交渉力がゼロの場合の特殊ケース
- モデルの骨子
 - 「組織準地代」
 - 企業という組織に固有な資源が生み出す剰余
 - 新古典派企業理論の設定ではゼロ
 - 組織準地代の分配をめぐる株主集団と従業員集団の間の交渉

企業の経済理論(続き)

- 「交渉可能性フロンティア」



- 生産開始前に株主集団と従業員集団は交渉可能性フロンティア上のその点を選択するかに関する交渉
→協力ゲームの解としての所得分配

企業の経済理論(続き)

- 経営者の役割
 - 経営政策・労働者報酬案の策定、株主・従業員集団への提案
 - その繰り返しを通じた協力ゲームの解への到達
 - 「裁定者」としての経営者
- 企業の法的モデルの比較分析
 - 株主主権＝団体交渉モデル(アメリカ)
 - 経営参加モデル(ドイツ)
 - コーポラティブな経営主義モデル(日本)

比較制度分析

- 「制度」への着目
 - さまざまな経済の機能の仕方、パフォーマンスを左右する要素としてしての制度
- 制度概念の発展
 - ゲームのルールとしての制度 (North 1990)
 - 人間の相互作用を形作る人為的に創出された制約条件
 - ゲームの均衡としての制度 (青木・奥野1996)
 - 非協力ゲームのナッシュ均衡
 - 特定の行動から乖離することによって各主体が自分の利得を増やすことができない状態 (自己拘束性)
 - 社会の安定した状況
 - 共有された予想の自己維持的システムとしての制度 (青木 2001)

比較制度分析(続き)

- 比較制度分析の考え方
 - 制度の多様性
 - 均衡となる安定した状態は複数あり得る
 - 制度に関する歴史的経路依存性(path dependence)
 - 歴史的事象によって1つの均衡が選ばれると、以後、安定してその状態が持続する
 - 制度間補完性
 - 制度を決めるゲームが複数ある場合
 - ゲームAとゲームBの結果に相互依存関係
 - 国ごとに固有の安定した制度の組み合わせ
 - 制度の組み合わせとしての経済システム

比較制度分析(続き)

- 日本の経済システムへの応用
 - 雇用システム
 - 代替的雇用システム
 - Jタイプ
 - » 長期雇用と企業特殊的技能
 - Aタイプ
 - » 短期雇用と一般的技能
 - 2つの補完性
 - 企業による雇用システムの選択に関する戦略的補完性
 - 労働者の技能形成と企業の雇用システム選択の間の戦略的補完性

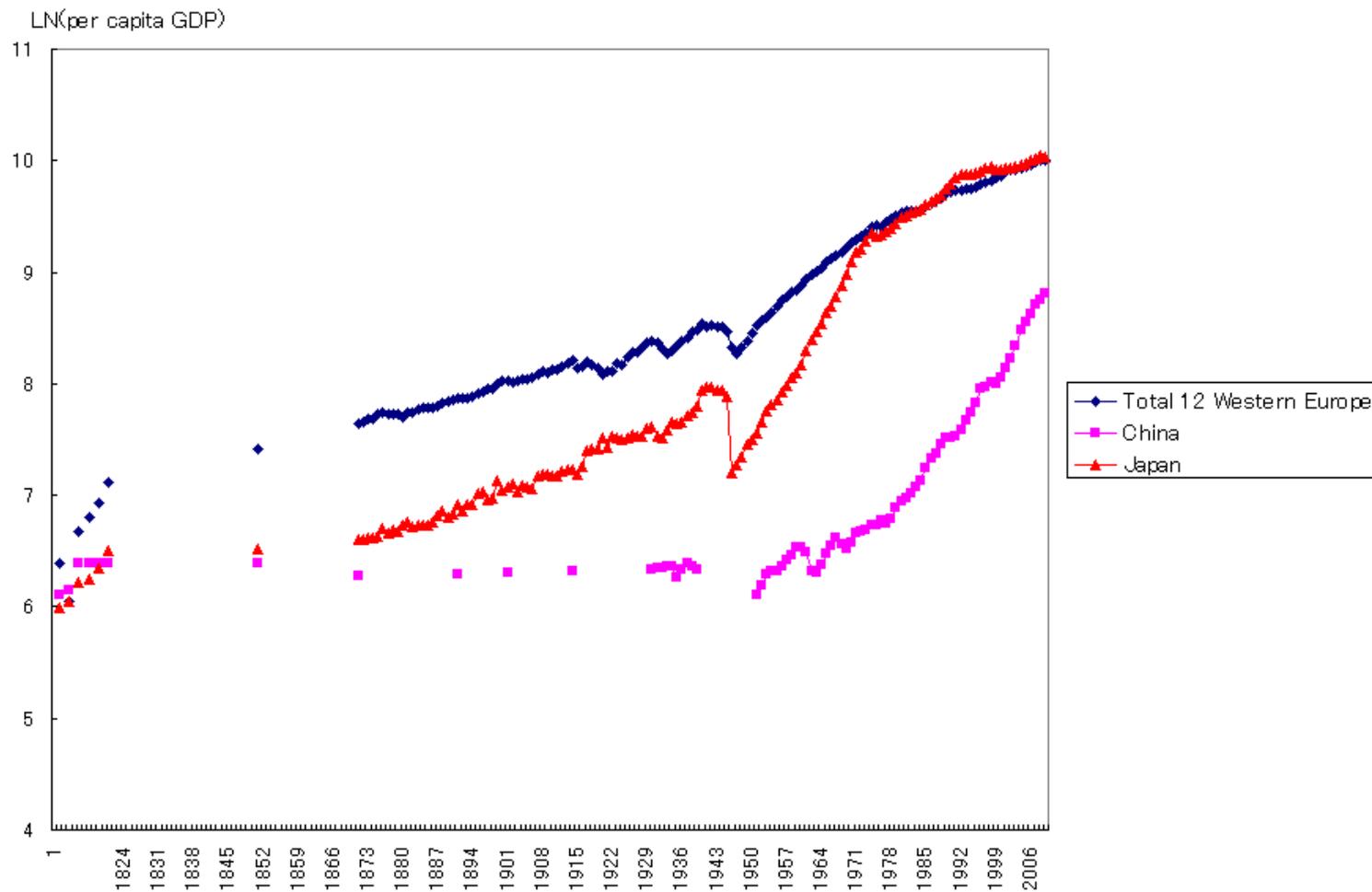
比較制度分析(続き)

- 日本の経済システムへの応用(続き)
 - 金融システムとコーポレート・ガバナンス:メインバンク制
 - メインバンク制
 - 企業との多様な関係を通じてモニタリング機能を統合
 - 「状態依存型ガバナンス」
 - 労働者チームによる生産
 - 経営状況によるコントロール権と分配の変化
 - 雇用システムと金融システムの制度間補完性
 - 企業特制的熟練への投資が大きい(Jタイプ)ほど、状態依存型ガバナンスが労働者チームの努力水準を高める効果大きい

歴史的体制移行のゲーム理論的分析

- Aoki, “A Three-Person Game of Institutional Resilience versus Transition: A Model and Comparative History of China-Japan Revisited” (2015)
 - スタンフォード大学病院のベッドの上で最後まで改訂に取り組んでいた論文
- 背景
 - Great Divergence and Convergence

歴史的体制移行のゲーム理論的分析(続き)

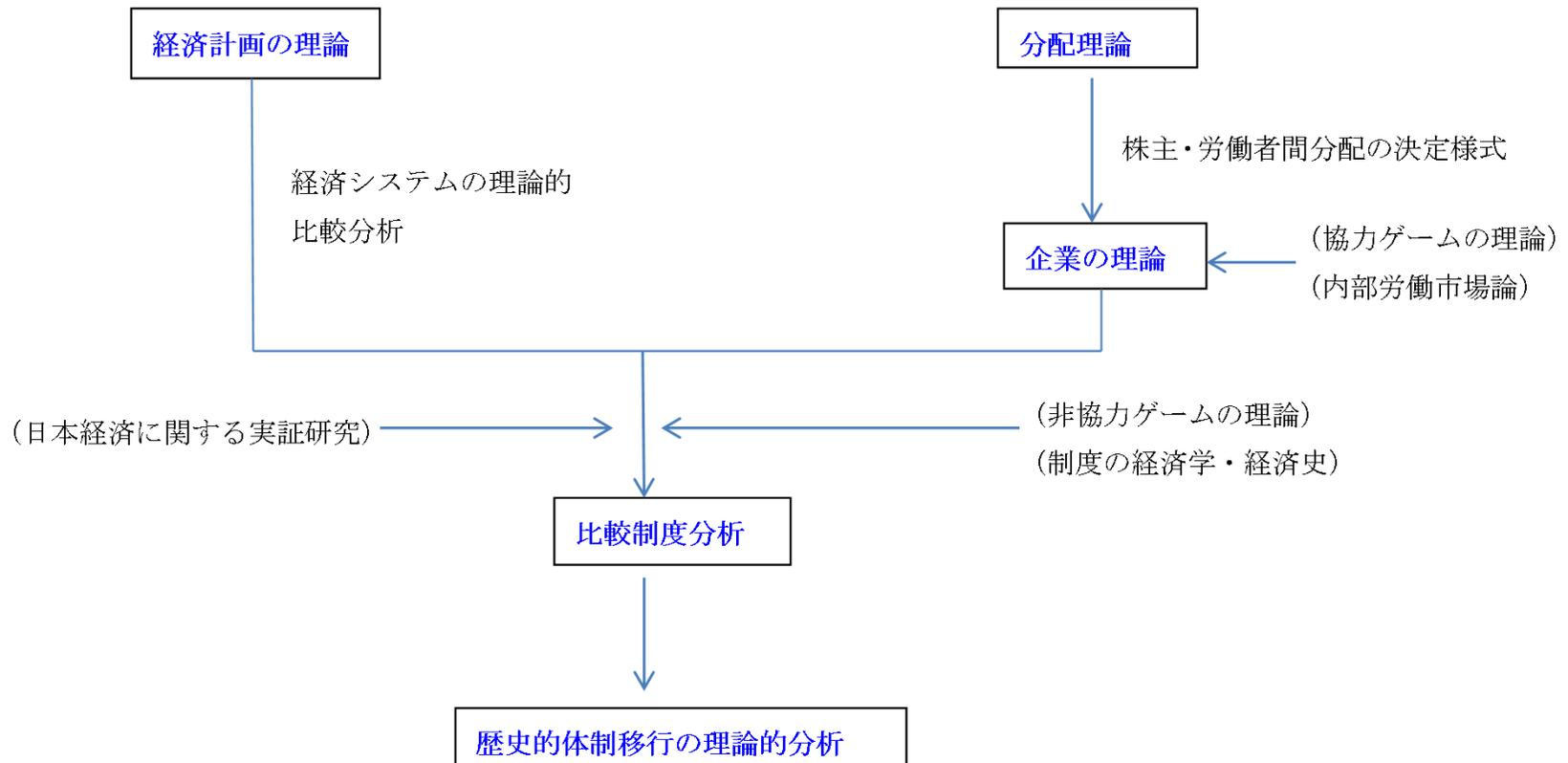


資料: Webpage of Angus Maddison.

歴史的体制移行のゲーム理論的分析(続き)

- 日本と中国における近代国民国家への体制移行プロセスの理論的・歴史的比較
 - 明治維新(1868年)と辛亥革命(1911年)
- 3人のプレイヤーによるゲームの定式化と分析
 - 支配者、挑戦者、機会主義者
- 日中の体制移行の共通性と相違
 - 機会主義者の戦略変更による体制移行
 - 移行推進者たちの同質性と異質性

まとめ: 青木昌彦先生の経済学



おわりに

- 青木先生の経済学研究の特徴
 - － 関心・思考の一貫性・連続性
 - － 飽くことのない知的探求心と統合・創造能力
 - － 「若き日の心情」
 - 「さして知的な創造力と分析力を要しない怠惰な政治的、教条的思弁は、経済システムの選択にかかわる理論を人間の間人らしいかわり方を追求するという道徳的権威にではなく、非人間的な政治的権威に従属せしめることにおわるであろう」(『組織と計画の経済理論』1971、まえがき)
- 現実(経済産業政策)へのインパクト
 - － 「産業構造審議会基本問題調査会中間報告書」(1993)
 - 「21世紀の我が国経済にふさわしい新たな制度的枠組みを構築するという観点から、企業システム、雇用システム、金融・資本市場システムに関連する各種の制度改革を行うべきである」
 - 制度・構造改革政策としての経済産業政策